

## なぜ小児性犯罪は起きるのだろう？



### A. 複合的な要因があるとされているのよ。

子どもを狙う性犯罪の加害者、といっても、性欲を満たしたいがためだけ、ということだけではない、とされているの。

小学生以下の子どもに対して性的指向を持っていて、本人もその思考を行動化していたり、一緒に居たいという気持ちに歯止めが効かなかったり何らかの機能障がいが生じている状態を「小児性愛障がい(ペドフィリア=Pedophilic Disorder)」と呼んで、精神疾患の一種とみなされているの。

反復性や衝動性の高さから性的嗜癖行動(行為依存)としての側面もあるといわれているわ。

行為依存は、ある特定の行動や要因によって、脳にある「報酬系」と呼ばれる神経回路が刺激されるのね。

刺激されることによって、ドーパミンと呼ばれる物質が分泌されて、満足感や快感を得ることになるの。

この繰り返しによって「報酬系」という神経回路が強化されていって、そのうち条件反射の回路が出来上がってしまうの。

小児性愛障がいの場合は、子どもに対して慢性的に思っている願望や行動が報酬系の回路を刺激し続けるのね。

歪んだ認知に基づいた目に映る「子どもが受け入れてくれた」「自分との関係性を求めている」という錯覚を成功体験と誤認してしまうのよ。

そして、まちがった成功体験が重なるたびに、行動が強化されてしまい、もっと、もっと、と次の行為に駆り立てられ、行為依存していつってしまうのよ。

小児性犯罪に限らないことなのだけれど、性欲を満たしたい、というところだけを見てしまうと本質を見失ってしまうように思うわ。

本当は、もっと別の要因がその犯罪に結びついているとしたら、気を付けなくてはいけないことも変わってくるよね。

なぜその人はそういうことをしてしまうのか、というところを押さえて情報や知識を上書きしていく作業が必要になってくるの。

怖くてフリーズしている状態を「自分を受け入れてくれたのでじっとしている」や、痛くて睨みつけているのを「私を誘っている」、イヤで涙ぐんでいるのを「感じている」。  
慢性的に思っている、子どもをどうにかしたい、という強い欲求を具現化して、やり遂げるために、見えている現実や感じていることを、都合よく歪ませてしまうのね。  
これを「認知の歪み」と呼んでいて、ある嗜癖行動を継続するための、本人にとって都合のいい認知の枠組み、根本的な理由のすり替え、なのね。

子どもに与えられたのはれっきとした「暴力」であるにもかかわらず、それを「愛」であると本気で心から、歪んだ認知で見えてしまっていること自体が問題なのよ。  
やってはいけないこと、と解っていないがやるために、自分のしていることを正当化して「間違っていないはずだ」「悪いことはしていない」と都合よく認知を歪めてしまうのね。  
「子どもが求めているから」「喜んでいるはず」という自分にだけ都合のいい理由(認知の歪み)を作り上げてしまうの。

普通だったら、ふざけてる！、としか聞こえないけれど、当人にとっては大真面目に思い込んでいることだから、平気で問題行動を繰り返してしまうの。  
ハラスメントやDV、性暴力を繰り返す人にも特有の認知の歪みがあるのだけれど、「相手は喜んでいた」「向こうから誘ってきた」「相手のためだ」などは、共通して語られる理由のようなもの、といえるわね。

子どもが自分で自分を守ることには限界があるから、守るのは大人の役目ね。  
1対1などの怪しい状況を作り出さない、複数の目で子どもと接する、などの細かいことの積み重ねが、実際の支援の中では必要になってくると思うわ。  
法律も強化されてはいるけど、まずは一人ひとりの心掛けが大切、ということなのかしら。

## [《MENU》](#)

[《自立支援協議会って？》](#)

[《就労移行支援ってというのは？》](#)

2022-10-31 掲載